

アイ, ロボット (i, ROBOT)

2004(平成16)年7月29日鑑賞(試写会・ナビオ TOHO プレックス)

★★★★



監督＝アレックス・プロヤス／原案・脚本＝ジェフ・ヴィンター／脚本＝アキヴァ・ゴールズマン & ジェフ・ヴィンター／出演＝ウィル・スミス／ブリジット・モイナハン／アラン・テュディック／ブルース・グリーンウッド／ジェームズ・クロムウェル／チャー・マクブライド (20世紀フォックス映画配給／2004年アメリカ映画／115分)

第3章

スクリーンの彼方に世界が見える

……ロボットの初期的な実用化は既に進んでいる。家庭に1台という時代の到来も近い未来のこと！「ロボット3原則」の第1は「人間に危害を加えてはならない」だが、果たして、それだけで人間との共存は可能だろうか？殺人を犯すロボット(?)とロボットの反乱をテーマとした本格的なロボット映画。考えさせられることの多い、ハリウッド発のおススメ大作だ。

本格的なロボット映画の登場

『鉄腕アトム』は夢の世界だったが、21世紀を迎えた今、「人間の仲間」としてのロボットの開発・研究は急速に進んでいる。ソニーの「AIBO」やホンダの「ASIMO」をはじめとするロボット開発は、今後飛躍的に増大するにちがいない。工場労働者に代わって生産ラインに立つロボットや、家事労働をしたり介護を受け持つロボットは、すでに実用化の初期段階に入っている。また、大阪に残された「最後の一等地」である JR 大阪駅北側の梅田貨物駅、通称「梅田北ヤード」24ヘクタールの再開発のあり方をめぐっては、関淳一大阪市長を会長とする「大阪駅北地区まちづくり推進協議会」で議論を続けてきたが、2004年7月30日、同協議会は同地区の基本計画を策定したことを発表した。それによると、再開発の要となる先行開発区域の中の「ナレッジ・キャピタルゾーン」約1.5ヘクタールには、ロボット開発などの新産業や研究学術機能を集積させる計画となっている。

そんなロボットをめぐる、21世紀の初頭という時代状況の中で登場したこの『アイ, ロボット (i, ROBOT)』という映画は、期待どおりの本格的なロボット映

画。決して、マンガのようなSF映画ではない。ロボットが実用化されるという近未来を具体的に想定し、その時代を設計するについては、人間とロボットの共存関係はいかにあるべきかが重要なテーマであり、人間はそれを真剣に考えなければならぬという問題提起をした、最近珍しい「骨太」のハリウッド映画。

2035年、シカゴ

今から31年後、すなわち2035年のシカゴが舞台。ここに本社を置く大企業 U.S. ロボティクス社 (USR) は、今、従来の NS-4型に代わる、新世代の家庭用 NS-5型ロボットの大コマーシャル中。何でも2035年の今は、5人に1人がロボットをもっている。そして、数日後には、2億体の NS-5が世界各国で奉仕を始めることになっているとのこと。

シカゴのまちの中を行き交う人々に混じって歩いているロボットの姿も多い。移動中の彼ら(?)は、ポーターのように人間の後について荷物を運んだり、郵便物を配達したりしているのだろう。また、道路ではゴミ回収の仕事に従事しているロボットもいる。レストランのウェイターやウエイトレスも、もちろんロボット。他方、2035年ともなると、シカゴのまちの様子も2004年の現在とは一変している。超高層ビルの林立は当然として、車が走る道路はすべて地下道だし、車は前後だけではなく左右にも進むことができる球形車輪。リュック・ベッソン監督が描いた近未来の映画『フィフス・エレメント』(97年)には、空中(の道路)をタクシーが走り回るといったシーンが登場したが、この映画ではさすがにそこまでは進んでいない。しかし、世界平和のもとで、順調に科学技術が進むことを前提としたうえで、今から30数年後のシカゴのまちの姿をどう想定するかは、すごく興味深く夢のある作業……。

企画、構想とアイザック・アシモフ博士

この映画が完成するまでには、10年間の企画、構想があったらしい。アレックス・プロヤス監督は、1963年生まれの若手だが、ロボット工学を題材にした大作映画の製作に意欲をもった20世紀フォックス映画とともに、企画構想を練りあげていた。その発端は、ジェフ・ヴィンターという人物が売り込み用に書き上げた

『Hardwired』と題する、ロボットが容疑者となる殺人事件を描いたミステリーの脚本。そして、その企画を広げ、壮大な構成を完成させる助け船となったのが、アイザック・アシモフ博士の書いた『われはロボット』という小説とその映画化権の獲得。この『Hardwired』と『われはロボット』とのカップリングの中で、この『アイ、ロボット (i, ROBOT)』という壮大な映画の構想が完成したわけだ。

ところでパンフレットによれば、このアイザック・アシモフ博士は、1920年ロシアで生まれ、3歳の時にアメリカに移住し、コロンビア大学で化学を学び、1948年に博士号を取得。翌年から1958年までボストン大学医学校で助教授を勤め、その後、フルタイムの作家に転身した人物とのこと。そして、1992年に亡くなるまでに数多くのSF小説を残し、その著作は300作を超えるとのこと。

重要なテーマは、ロボット3原則

映画の冒頭、スクリーンに「ロボット3原則」の文字が流れる。それは、

- 第1条 ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。
- 第2条 ロボットは人間に与えられた命令に服従しなければならない。ただし、与えられた命令が第1条に反する場合は、この限りではない。
- 第3条 ロボットは、前掲第1条および第2条に反する惧れのないかぎり、自己を守らなければならない。

パンフレットによれば、この「ロボット3原則」は、アシモフが21歳のとき、SF誌『アスタウンディング』に採用された短編『われ思う、ゆえに……』（別題『理由』）に登場するロボットの行動原理をもとに、鬼編集長ジョン・W・キャンベルが「3原則」を明文化し、アシモフと一緒にまとめたものとのこと。

2035年のシカゴにおいては、2億体のNS-5ロボットを生産、配給するUSR社の創始者で最高責任者であるローレンス・ロバートソン（ブルース・グリーンウッド）や、USR社に勤務するロボット心理学者のスーザン・カルヴィン博士（ブリジット・モイナハン）をはじめ、すべての人々は、「ロボット3原則」によって、ロボットは安全な存在だと信じていた。

しかし、ここに1人、それに疑いをもつロボット嫌いのデル・スプーナー刑事（ウィル・スミス）がいた。

他方、この映画における「事件」発端の原因となるのがアルフレッド・ランニング博士（ジェームズ・クロムウェル）。ランニング博士は、USR社の中で研究をしていた現代ロボット工学の第一人者。しかし、このランニング博士が飛び降り自殺をすることに。そして、なぜかこのランニング博士から連絡を受けたスプーナーは、USR社に向かい、最高責任者のロバートソンと対峙することに。

この映画が単なるSFモノや刑事スリラーモノではなく、本格的な問題提起作品となっているのは、この「ロボット3原則」をめぐる価値観、そして、機械としてのロボットと心をもった人間との対決を、真正面から捉えて描いているためだ。映画の中で語られる「人間が人間を殺すから殺人罪が適用されるのであって、ロボットが人間を殺しても殺人罪は適用されない」というセリフは、当然正しいものだが、それだけで問題が解決しない事態が発生すれば一体……？

主役は2人と1台（？）

この映画の主役は、ランニング博士の自殺（？）事件の捜査にあたる、ロボット嫌いのシカゴ市警殺人課のスプーナー刑事。これに扮するのはウィル・スミス。『メン・イン・ブラック』『バッドボーイズ』でのドタバタ、しゃべくりのイメージが強いが、『アリ』（01年）での好演技とこの映画を観れば、こういう本格的な演技の方が断然いい。かなり無茶な捜査をやる異端派刑事だが、上司のジョン・バーギン警部補（チャー・マクブライド）の信頼も厚く、何よりも人間の熱いハートをアピールする姿と、自分1人でも信念を貫くという姿勢が頼もしく、実にカッコいい。冒頭、川の中に落ちた車から脱出できず、苦しむ女性の姿にうなされて目を覚ますシーンが思わせぶりに登場するが、これが一体何を暗示するのか、途中まではサッパリわからない。しかし、そのシーンの重い重い意味が後半になってよく伝わってくる。

次の主役はスーザン・カルヴィン博士（ブリジット・モイナハン）。「ロボット3原則」を信奉している彼女は、USR社に勤務する優秀なロボット心理学者。したがって、ロボットの殺人容疑を主張するスプーナー刑事と真っ向から対立す

る立場。しかし、現実には次々と発生する現象は……？ そして、もう1人の主役サニー（アラン・テュディック）との対話（？）が進む中、彼女も次第に……。

第3のユニークな主役は、サニーと名づけられたロボット。彼（？）が殺人罪の対象になるのかどうかは微妙な問題。つまり、機械なのか、それとも人間なのかの判定が難しい特殊（映画の中の英語のセリフではユニーク）な存在。もちろん、サニーの肉体は100%ロボットだが、人間の感情をもっているうえ、なぜか「ロボット3原則」がプログラミングされていなかった。

ロバートソンが、こんなサニーを早期に廃棄処分すべきと主張したのは当然。なぜなら、人間に危害を加える可能性のあるロボットが存在していることが世間に知られると、NS-5の売れ行きに影響することは明らかだから。そして、ロボットに殺人罪を適用することはできないとする検事の判断にしたがって、シカゴ警察もサニーを釈放（？）することに。このサニーを廃棄処分にする仕事は、ロバートソンとカルヴィン博士の話し合いにより、カルヴィン博士が実行することに。スプーナー刑事の意見とロバートソンの意見をよく聞き比べた上で、カルヴィン博士はサニーの廃棄処分の実行を決心したはずだったが……？

ロボットの真の支配者は？

サニーが、殺人行為＝「ロボット3原則」違反の行為を行ったのは、ロバートソンの世界統一戦略の策謀によるものだと目をつけたスプーナー刑事は、懸命の捜査を続けるが、スプーナー刑事は何度もロボットに襲われて大変な目に……。『マトリックス』をはじめとする、ハリウッド映画で大はやりのワイヤーロープアクションに飽き飽きしている私にとっては、このロボットと人間との対決は、新鮮なアクションの連続ですごく面白いもの。みなさんにも十分楽しんでもらいたいものだ。

それはさておき、このスプーナー刑事の見込みは正しかったのだろうか……？ USR社の最高責任者はロバートソンであり、ロバートソンがすべての戦略の決定をしていることは明らかだが、それを現実に執行しているのは「V.I.K.I.（ヴィキ）」と名づけられた全能のコンピュータ。

そのシステムは私には全然わからないが、ヴィキは、USRビル全体の中枢頭

脳であるとともに、全国2億体のNS-5に指令を出す役割を担っているわけだ。すると、万一この全能コンピュータであるヴィキが反乱をおこせば一体……？

スパルタカスの反乱、それともフランス革命？ ロシア革命？

この映画の後半は、深く重いテーマを人間につきつけてくる。それはつまり、「ロボットの反乱」。かつて、ローマの圧制に苦しんだ奴隷たちは、無謀とも思える反乱を引き起こした。その姿を描いたのが『スパルタカス』(60年)で、マイケル・ダグラスの父親のカーク・ダグラスの代表作。ローマ正規軍との戦いに敗れた奴隷反乱軍に対して、「スパルタカスは名乗り出ろ！」とローマ軍は要求。しかし、そこで一斉におこった大合唱は、『I am Spartacus』と叫ぶもの。この感動的なシーンは、今でも私の心の中に焼きつけられている。

反乱や革命は人間の歴史につきもの。1789年のフランス革命や、その後のロシア革命等の大ドラマも、すべて不可避免的に発生したものと私は考えている。

人工知能をもったロボットがどんどんと進化し、知能や体力においては人間をしのぐ性能のものが次々と生まれてくるはず。その時、「ロボット3原則」だけで、ホントに人間とロボットの共存関係は維持できるのだろうか……？ そう考えると、この映画に描かれた、「ロボットの反乱」も不可避免的……？

ロボットの反乱は？

ロボットの反乱というテーマをもっと現実的に考えれば、コンピュータの反乱がある。ウイルスやハッカーは人為的なものだから、現在はまだコンピュータは人間が支配しているといえるだろうが、近い将来はひょっとして……？

私の大好きな将棋の世界では、既に数年前からパソコン将棋が実用化し、プロ棋士たちもこれを活用している。現在、そのパソコン将棋の腕前は、プロ棋士の腕には届かないが、既にかんりの実力。コンピュータがいくら進化しても、プロ棋士の頭脳の中に詰まっている読みの力や直感力、決断力には到底及ばないと言われているが、果たしてそれもホントかどうか……？ そのうち将棋の世界でも、パソコン将棋の反乱がおこるかも……？

2004(平成16)年7月30日記